

野 呂 賞

東北大学選鉱製鉄研究所教授・所長

大 森 康 男 君

主として製鉄部門の研究活動による協会事業への功績



君は昭和 29 年 3 月東北大学工学部金属工学科を卒業後、東北大学大学院工学研究科にて修士ならびに博士課程を修め工学博士を取得、昭和 34 年同大学選鉱製鉄研究所に勤務し、37 年助教授、45 年教授、62 年 11 月同研究所長となり現在に至っている。

その研究歴の前半は、主に鉄鋼製錬における高温融体反応の熱力学的研究と速度論的研究に従事し、昭和 40 年以後は主として高炉製鉄法および直接製鉄法に関連した反応工学的研究、すなわち焼結鉄製造プロセスの理論ならびに実験的研究や高炉におけるコークスのガス化反応の反応速度および輸送現象、鉄鉱石塊成鉄のガス還元、高温性状の研究に従事し、多くの先駆的研究成果を挙げた。それらの業績により、西山記念賞ならびに依論文賞（昭和 54 年、63 年）を受賞している。

君は、研究と教育に専念するかたわら日本鉄鋼協会の活動に貢献した。すなわち、昭和 54 年から 60 年まで 2 期 4 年間理事に選任され、また昭和 52 年から 5 年間鉄鋼基礎共同研究会高炉内反応部会長を務め、さらに昭和 55 年より 5 年間編集委員会欧文誌分科会主査ならびに幹事、また鉄鋼工学セミナーの製鉄コース主査（2 期）を歴任し、本会事業の推進に貢献し、現在同セミナー委員長として尽力している。

君は、高炉内反応部会長の時代には、1970 年代にわが国で次々に行われた実高炉の解体調査を科学的立場より総合的に調査し、その知見に基づく高炉内現象の理論的解析を行う目的で製鉄分野の研究者、技術者によるチーム研究の推進に尽力し、優れた部会報告書ならびに英文による Blast Furnace and Modelling を刊行し、国内外にその成果を広め、部会としての山岡賞受賞に導いた。

欧文誌分科会主査時代には、掲載記事の内容充実と多様化のため編集、投稿規定の改定や、英文 Abstract の充実をはかるなどに功績をあげた。

鉄鋼工学セミナーについては、その発足直後から企画と運営に参加して、その充実に務め、現在「蔵王セミナー」として定着しているセミナーの発展に貢献した。

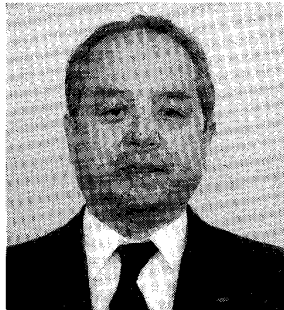
君は、このように本会における活動のみならず、日本学術振興会製鉄第 54 委員会委員長を昭和 56 年より現在まで務め、産学連携による製鉄分野の基礎および応用研究の推進に努め、また ISO の Technical Committee (TC102)「鉄鉱石」の物理試験専門委員会国際議長としてその標準化事業の活動を積極的に進め、国際的に高い信頼と評価を得ている。

野 呂 賞

日本鋼管(株)鉄鋼研究所部長

川 上 公 成 君

新分野の導入による協会活動活性化の功績



昭和 30 年 3 月名古屋大学工学部金属学科卒業、同大学大学院工科（金属）において修士過程を昭和 32 年 3 月修了。直ちに日本鋼管(株)に入社、鶴見製鉄所製鋼部、36 年技術研究所製鋼圧延研究室係長、41 年福山製鉄所管理部、同技術試験室課長（昭和 44 年工学博士）、48 年(株)吾嬬製鋼所仙台研究

室長、53 年中央研究所第一研究部部長、59 年中央研究所主任研究員。61 年 1 月から 63 年 7 月の間、国際協力事業団の派遣によりアレキサンドリア大学工学部客員教授として、エジプトおよび中東地区に初の「鉄鋼工学講座」を開設し技術移転を実施した。63 年 7 月日本鋼管(株)技術開発本部付部長、同 10 月鉄鋼研究所部長として現職にいたっている。

一貫して製鋼技術に従事し、精錬から凝固にいたる研究と開発を研鑽した（昭和 56 年西山記念賞受賞）。最近では製鋼の将来技術に関して、鋼の高純度化と連続化技術の啓蒙を行い、内外に多大の業績を挙げた。また日本政府の派遣により国際技術交流の一貫として、日本の鉄鋼技術・工学の普及に大きな功績を挙げた。

日本鉄鋼協会関係としては、昭和 54 年度から 60 年度に編集委員、57 年から 61 年に研究委員を務めた。この間、59 年から 61 年の間に初代の編集委員会 Materials Processing (MP) 専門委員会委員長として、萌芽・境界技術部門の導入とその定着化に非常な努力を尽くした。この導入に当たっては、慎重な準備を重ねた上、鉄鋼協会の創立 70 周年を期して、昭和 60 年度春期講演大会から実施した。会員並びに維持会員会社の技術活動が、鉄鋼技術を中心として非鉄・非金属にわたって幅広く多岐に展開しつつある現状を見ると、萌芽・境界技術部門の導入とその定着化に努力したことは、先見の明がありかつ協会活動の活性化に非常な貢献である。

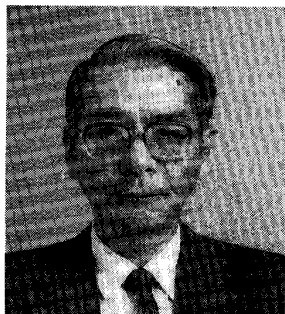
57 年から 60 年の間、研究委員会からの委嘱を受けて、当時初めて設置された調査研究小委員会（製鋼）委員長を務めた。粗鋼生産量の変動、電気炉鋼のシェア拡大、NIES 鉄鋼技術の台頭、学生の製造業ばなれなどの環境の変化の中で、21 世紀につながる将来技術を模索し、同小委員会として「製鋼の将来技術」をとりまとめ、その実践に努力した。

その具体化項目の一つとして、電磁気冶金（ビーム精錬・流動制御）を提唱し、特基研「電磁気冶金部会」（60 年発足）の創設に努力した。国際的にも日本が先駆的・指導的な役割を果しうる部会として内外の関心を深め、部会そのものも急速に成長してきている。

野 呂 賞

社団法人日本鉄鋼協会常任顧問

三 井 太 信 君

協会活動とくに技術情報活動ならびに国際交流に対する
貢献

君は昭和16年12月東京大学工学部冶金学科卒、17年1月商工省に入省、29年8月製鉄課長、30年11月在フランス大使館勤務、34年6月技術協力課長、37年5月通商産業省を退任、八幡製鉄(株)に入社、八幡製鉄特殊鋼技術部長、本社技術開発部長を歴任し、43年5月IISI事務局次長としてブラッセルに派遣され、47年6月新日本製鉄に帰任、エンジニアリング事業本部副部長に就任、49年12月参与、51年4月日本鉄鋼協会の香村賞を受賞した。52年12月退社、53年1月日本鉄鋼協会参与に就任、55年4月常務理事、63年4月常任顧問として現在に至る。この間53年4月より鉄鋼技術情報センター所長を勤め、63年4月退任した。

君は日本鉄鋼協会事務局に就任以来鉄鋼技術情報センターの設立準備を担当し、協会財務困難な折にもかかわらず、53年4月同センターの設立に漕ぎ付けその所長となつた。以来鉄鋼関連技術情報の収集、蓄積、普及に努力した。この間日本科学技術情報センターを主体とした技術情報サービスの機械化の進展にともない、これと密接に連繋して、鉄鋼及び関連する技術分野の情報収集を行い、これを機械可読形式に抄録して前記センターの入力として送付、また前記センターの端末機による出力により機械化情報の進展、普及に尽力した。また鉄鋼およびその関連分野の技術文献の購入、特に国際会議プロシーディングスおよび数値データ集の収集整備に努め、一般来訪者の閲覧に供した。また日本鉄鋼協会共同研究会の資料のマイクロフィシ化を行い関係会社に頒布した。一方諸外国の鉄鋼情報システムを訪問調査し、また諸外国からの情報関係訪問者、研修員の応接に当つた。以上の努力により鉄鋼及びその関連分野の技術情報は、他の業界、学界に魁けて組織的に整備、蓄積、普及され今日に至っている。上記の活動により63年4月日本科学技術情報センターの丹羽賞を受賞した。

君はまた4年間にわたりIISIの事務局に次長として鉄鋼技術の交流と向上に盡力したほか、協会常務理事としては海外技術交流分野に属する活動に参画し、世界冶金学会役員連絡会に数回出席し、国際会議の円滑な開催の調整作業に参画し、日本鉄鋼協会主催の会議の推進に尽力した。また海外の冶金学会の実情を調査して日本鉄鋼協会の海外技術交流の参考とし、またこの関係の海外からの訪問客の応接に努力した。

俵 論 文 賞

日本重化学工業(株)フェロアロイ事業部技術部

藤 田 正 樹 君

新日本製鉄(株)中央研究本部第三技術研究所

製鋼研究センター主任研究員

片 山 裕 之 君

新日本製鉄(株)中央研究本部第三技術研究所

製鋼研究センター研究員

桑 原 正 年 君

新日本製鉄(株)中央研究本部第三技術研究所

製鋼研究センター主任研究員

斎 藤 力 君

新日本製鉄(株)中央研究本部第三技術研究所

製鋼研究センター主幹研究員

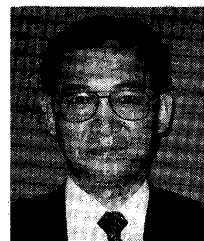
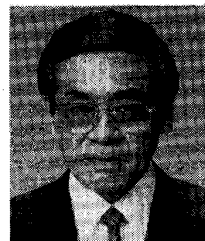
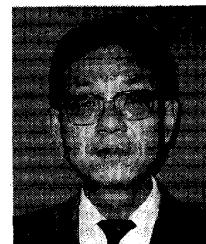
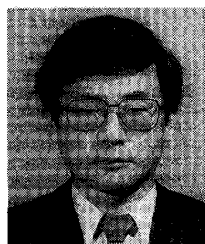
石 川 英 毅 君

新日本製鉄(株)中央研究本部第三技術研究所

製鋼研究センター所長・主幹研究員

梶 岡 博 幸 君

強攪拌浴におけるクロム鉱石ペレットの熔融還元反応
(鉄と鋼, 74 (1988) 4, pp. 680~687)



藤田君は昭和51年3月東北大学工学部金属工学科卒業、同年4月日本重化学工業(株)入社フェロマンガ、フェリクロム製造部門に従事現在に至っている。昭和57年より昭和62年まで新日本製鉄(株)第三技術研究所製鋼研究センターへ派遣され、製錬新基盤技術研究組合の『フェロクロム熔融還元製錬研究』に従事。

片山君は昭和39年3月東京大学冶金学科卒業、同年4月八幡製鉄(株)入社、東京研究所第3基礎研究室、八幡技術研究所製鋼研究室、生産技術研究所精錬凝固研究室を経て、第三技術研究所製鋼研究センター主任研究員となり現在に至っている。昭和57年より62年まで製錬新基盤技術研究組合の『フェロクロム熔融還元製錬研究』に主任研究員として従事。

桑原君は昭和36年3月都立化学工業高等学校卒業、同年4月八幡製鉄(株)入社、東京研究所、基礎研究所第5基礎研究室、生産技術研究所熱プロセス研究室、精錬研究室を経て、第三技術研究所製鋼研究センター研究員